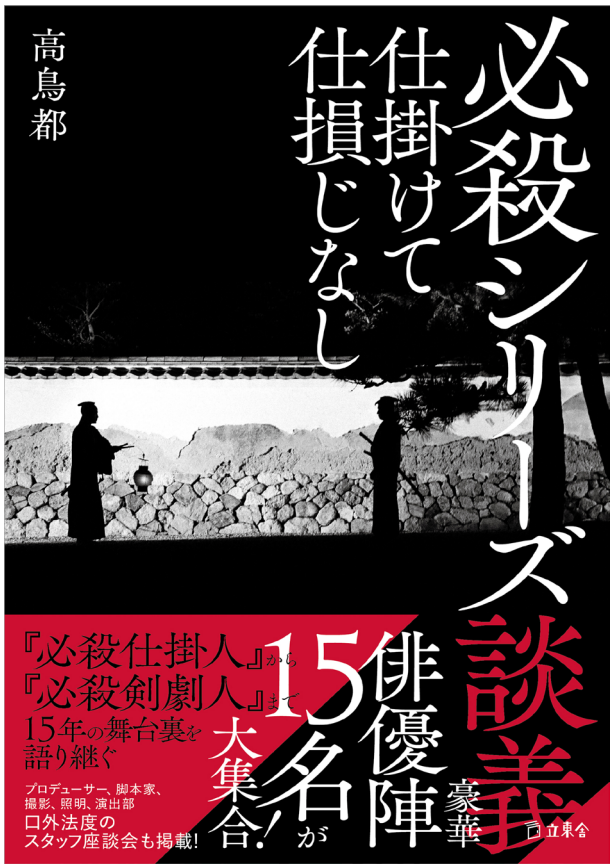
RittorMusic
An impress Group Company

各　　位

2024 年 10 月 9 日
株式会社リットーミュージック

『秘史』『異聞』『始末』に続く第 4 弾は『談義』
高鳥都の必殺本に新たな展開、今回は俳優陣を大フィーチャー！



インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）内で文芸・カルチャー関連を扱う出版レーベル立東舎は、『必殺シリーズ談義 仕掛けて仕損じなし』（高鳥都 著）を、2024 年 10 月 18 日に発売します。

俳優

林与一

鮮明に思い出すのは、やっぱり立ち回りと監督ですね それから編集の園井さんが上手かった

シリーズ第1弾『必殺仕掛人』で西村左内を演じた林与一は、着流しの浪人にしてマイホームパパの殺し屋という表と裏の顔を使い分け、必殺シリーズの礎となった。ダブル主演の藤枝梅安役・緒形拳とのライバル関係に深作欣二、三隅研次ら監督陣の思い出など……仕掛けて仕損じなし、怒涛のロングインタビュー！

「これ、ラストも同じ殺し方にしようか」

林　この間ね、偶然お寺さんに頼まれてね、法話みたいな講演をしてほしいと大阪に行ったんですよ。それで終わったら、なんとそこに山内久司さんのお墓があるということで、お参りしてきました。そう、ぼくを『仕掛人』に呼んでくれたプロデューサーです。そこは大善寺というお寺で、山内さんの近くにミヤコ蝶々さんのお墓があ りました。

――そうでしたか。『必殺仕掛人』（72～73年）で主人公の西村左内を演じた林さん、長きにわたる必殺シリーズはここから始まったわけですが、まず思い出すことはありますか？

林　とにかくいちばん最初の「仕掛けて仕損じなし」ですか、深作（欣二）さんが監督のときに室田（日出男）くんを斬るシーンがあって、その前に彼が浪人を斬るシーンがあったんですね。それを見ててね、殺陣師の栄ちゃん（楠本栄一）とぼくと監督とで相談して「これ、ラストも同じ殺し方にしようか」ということで、浪人が斬られたのと同じ太刀さばきになったんです。あのとき、大映の三隅研次さんがベテランで、東映の深作さんはまだ若かったんですけど、その三隅さんが「あなたが撮ったイメージを受け継ぐから、好きなように撮りなさい」って、深作さんの自由に撮らせたの。その検定の試写を見て、こういう雰囲気の作品というのが決まったんですよ。

――室田日出男さん演じる作事奉行を斬るシーンでは派手な血しぶきが飛び散り、過激なテレビ時代劇の幕開けのような演出でした。

林　あれもリアルですよね。血が吹き出すのも一発勝負で、こっちにかからないようにしながら室田くんが七転八倒する。かつらだってクシャクシャになるけど、陣笠かぶってるから上手くごまかせてるんですよ。もともと

俳優

ジュディ・オング

若山先生と山田先生に教わった所作や日本文化、人といるときの立ち振る舞いは一生ものです

台湾出身の歌手であり俳優のジュディ・オングは、70年代に各社のテレビ時代劇で活躍。『必殺からくり人』のとんぼ、『新必殺からくり人』の小駒として山田五十鈴の薫陶を受け、『おしどり右京捕物車』『貧金稼ぎ』と異色のアクションにも挑戦した。ふたりの師匠から始まり、いま明かされる〝時代劇役者〟の軌跡！

山田五十鈴みずから三味線を伝授

ジュディ　山田五十鈴さんと若山富三郎さんが時代劇の師匠なんです。わたし、台湾生まれの外国人なので、おふたりともすごく丁寧に所作を教えてくださいました。それが時代劇役者になるために大切だったことですね。まず着物の所作として大事なのが〝姿勢〟。……肩甲骨を寄せて、真ん中に筋が立っている。山田先生からは「肩を落とし、スッと首が上から釣られてるような体勢で座りなさい」と言われました。姿勢が悪いと、かつらが重く感じるのです。首で支えるのではなく体の中心に乗せると、とても楽になります。若いお嬢さんと老婆、それも座り方ひとつで表現できるんですよ。「おばあさんのときは背中に薄く綿を入れなさい」という話だったり、役作りの宝庫だと思いながら聞いていました。

――ほかに学んだことはありますか？

ジュディ　体の内側に日本の音楽が入るということが大切で、山田先生は三味線を、若山先生は長唄を教えてくださいました。山田先生からは「日舞も覚えなさい」と言われて踊りの師匠を紹介していただき、若山先生からは「日舞をやってれば腰が落ち着く」ということで立ち回りの殺陣全般と、それから〝気合い〟を教えていただきました。

――まずは技術より気合いが大事ということでしょうか？

ジュディ　同時でしたね。気合いが入らないと怪我するし、気合いが入っていれば次にかかってくるものが見える。そういうことです。若山先生って居合い抜きがすごいんですよ。藁人形もパーッと斬っちゃうし、芸能界一じゃないかしら。それこそ抜刀から納刀まで、気合いそのものでした。

――三味線は山田五十鈴さんから直接教わったのでしょうか？

京都映画座談会 1

石原興（撮影）
＋
林利夫（照明）

われわれの仕事は
遊びみたいなもんですから

必殺シリーズの映像を作り上げたキャメラマンであり、現在は監督として活躍する石原興。
中島利男の助手を経て照明技師として石原を支えてきた林利夫。『必殺シリーズ秘史』から
『必殺シリーズ始末』までの3冊すべてに登場した大ベテランが、初の組み合わせで往時
を語り合う。知られざる下積み時代のエピソードから始まり、技術と演出の秘話満載！

必殺シリーズをずっと支えたスタッフたち

林　ほんまな、もう話すことないって何回も言うてるのに、今日は石原さんと一緒やからしゃあない。
石原　よくね、必殺シリーズっちゅうのは石原興と中島利男のコンビが光と影の映像を云々って言われますけど、いちばんの功労者はこの人なんよ。
林　いやいや、そんなことない。なにをいきなり……。
石原　けっきょく林くんがずっと助手からがんばってたから、ああいう照明にしても持続してるんです。ぼくはそう思うてんね。石原と中島なんか最初にやって目立ってるだけで、ずっと支えていったんは、この人。
林　でも目立つことをできるんは、あんたしかいいひん。
石原興が俺らの看板やから。
石原　林くんと編集の園井（弘一）さん、録音の中路（豊隆）……この人たちが必殺ナンバーワンですよ。
――みなさん、1972年の『必殺仕掛人』（テレビスペシャル版）まで、ずっとシリーズに携わっています。
林　ヒガシさん（東山紀之）になってからのスペシャルは照明、俺しかやってないからね。ええのか悪いのか、それはわからん。
石原　この人はね、ぼくの弟分みたいなもんやった。だいたい「必殺」の照明技師は3人とも名前が〝トシオ〟なんです。中島、林、それからにくなった中山（利夫）。ぼくの場合、中島は中やん、この人はトシやん、中山は中山って呼んでました。
林　中山もすごかった。もう身は軽いし、負けん気が強いから。人に負けるのがイヤやった。サブちゃん（藤原三郎／撮影技師）とも喧嘩してな……仕事上のことやから、別に仲が悪いわけやない。サブちゃんと俺、半年くらい一緒に寝泊まりしてたんや。あいつの部屋に。
石原　三郎はぼくの一番弟子で、いまBS朝日で再放送してるシリーズを見てても、めちゃめちゃ上手いと思うねん。晩年は力が落ちてショボかったけど、ほんまにデビューしてしばらくは「いやぁ、こいつすごいな」と思いましたよ。それから（都築）一興の弟、雅人もキャメラマンになった。
林　下鴨の時代から、めちゃくちゃピント送るん上手かったからな。この人、望遠ばっかりで撮ってた時代があ

089　京都映画座談会 1

088

『秘史』『異聞』『始末』に続くシリーズ第 4 弾となる本書では、スタッフ中心だったこれまでの方針を大転換。『必殺仕掛人』から『必殺剣劇人』まで 15 名の俳優陣が登場し、それぞれの役柄や撮影の裏話を披露します。また恒例の「京都映画座談会」を 3 本開催、スタッフ諸氏の自由奔放なトークが『必殺』の歴史に新たな光を当てています。総勢 22 名の大談義、ぜひご堪能ください。

書名：必殺シリーズ談義 仕掛けて仕損じなし
著者：高鳥都
定価：3,300 円（本体 3,000 円＋税 10%）
発売：2024 年 10 月 18 日
発行：立東舎／発売：リットーミュージック
商品情報ページ　https://rittorsha.jp/items/24317414.html

CONTENTS
R-1
林与一
石坂浩二
大出俊

R-2
ジュディ・オング
河原崎建三
近藤正臣

R-3
伊吹吾郎
三田村邦彦
西崎緑
ひかる一平
京本政樹
村上弘明

R-4
柴俊夫
梅沢富美男
かとうかず子

京都映画座談会
1　石原興×林利夫
2　藤井哲矢×都築一興×皆元洋之助
3　櫻井洋三×保利吉紀

COLUMN
必殺シリーズ 52 年のあゆみ

DOCUMENT
『必殺仕掛人』第 1 話番宣資料集

IMAGE
現場スナップ集
組紐屋の竜スナップ集
撮影所オープンセット集

高鳥都
1980 年生まれ。2010 年よりライターとしての活動をスタート。著書に『必殺シリーズ秘史　50 年目の告白録』『必殺シリーズ異聞　27 人の回想録』『必殺シリーズ始末　最後の大仕事』『あぶない刑事インタビューズ「核心」』、編著に『別冊映画秘宝　90 年代狂い咲き V シネマ地獄』『必殺仕置人大全』があり、『漫画＋映画！』ほか共著多数。

【立東舎】https://rittorsha.jp/
立東舎は文芸、マンガほか、さまざまな分野のポップカルチャーを紹介する出版活動を展開中。

「乙女の本棚」などの好評シリーズのほか、手塚治虫、谷ゆき子らの幻のマンガの復刻などで感度の高い読者の話題を集めている出版ブランドです。

【株式会社リットーミュージック】https://www.rittor-music.co.jp/
『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 RITTOR BASE」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やTシャツのオンデマンド販売サイト『T-OD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社リットーミュージック　広報担当
E-mail: pr@rittor-music.co.jp